

岩手日報 2015年3月12日付

※この記事・写真は岩手日報社の許諾を得て転載しています。

支える

いわて 震災4年

〈中〉

大船渡市内で行われている中学生対象の学習支援活動が「寺子屋いきいき世代」だ。赤崎町は「寺子屋 学びの会」(千葉広樹代表)、末崎町は郵便局期間雇用社員の板坂條子さん(49)を中心としたグループが、それ運営している。

寺子屋いきいき世代

大船渡市

赤崎町の赤崎漁村センター会場では、普段は公益財団で復興支援に携わる千葉代表(29)、英語塾を営む吉田久美子さん(66)らが子どもたちに付き添う。千葉代表は「居場所、学習いざれの面でも重要だと思うので、できるだけ長く継続したい」と意欲的だ。

開催されるのは、ほぼ毎週の土曜日。子どもたちが三々五々集まつてくる。それぞれ課題とする教科に、自主性をもって取り組む。スタッフは親身に優し

く子どもたちに接し、真剣な中にもアットホームな空気包まれる。

中学生に学びの場所



「寺子屋 学びの会」の千葉広樹代表(左)から指導を受ける赤崎中生

現在は2カ所とも地元中心の運営体制。それでも、夏・冬休みの時期などには、遠方からボランティアの人たちがやってきてサポートしている。

赤崎漁村センター会場に通う赤崎中1年3年、学習参加の中学生浦衣菜さんは「仮設住宅は狭くて勉強する場所がない。ここは友達

ら現地指導員が少人数りしておらず、地元ボランティアをしてくれる人を募集している」と協力を訴える。

学習支援は12年、ボランティア団体「ふんばろう東日本支援プロジェクト」の活動として、物から心への支援切り替えの合言葉のもと、赤崎町と末崎町でスタート。東京、仙台のボランティアらと地元が一体で、大震災のため学習環境の整わない子どもたちに居場所を提供してきた。

現在は2カ所とも地元資金面の支援も12年から続いている。東京の保険会社・SBIいきいき少額短期保険は活動の趣旨に賛同し、3年間で計340万円を寄付。全社員が毎

月も来るので楽しい」と言えば、同3年志田優介君も「社会科を中心勉強していく、ほぼ

毎週来ている。明るい雰囲気がとてもいい」と、お気に入りの場所と、お気に入りの場所のようだ。

開設2年目ぐらいまでは、一日中寺子屋会場で過ごす生徒が多くたといい、住宅事情を補完する役割を十分に果たしてきた。

ト